

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 小松宮殿下御來校の記 |
| Author(s) | |
| Citation | 龍南會雜誌, 6 2 : 1 - 2 |
| Issue date | 1897-12-27 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/4982 |
| Right | |

小松宮殿下御來校の記

今茲丁酉秋十一月、筑豐の野に於て師團對抗の演習あり、參謀總長小松宮殿下、御下向ありて、親しく御覽あらせ給ひきと承はるだにも、かしこくも思ひまつりしを、その軍もはて、後更に對州沖繩の海防をも見そなはせ給ひ、その御歸るさに、月の二日、御車を熊本に枉させらるゝと聞えければ、我校職員生徒一同奉迎、夜の七時頃に、恙なく着かせらる。折しも金峯おろしの吹きしきて、滿天の月皎々として霜を結ひ身もふるふ斗りなりしも、程なく、殿下の清塵を拜することを得たる、滿路の喜氣に寒威も忽消して、煙火空に緩ひく。さて四日といふ日には、親しく我校にも臨ませらる、その日の御模様を記さんに、午後一時三十分偕行社御出發、我學校長殿御先導申奉り、一時五十分御着あらせられ、外門より中門に至るまで、職員生徒出迎奉り、直に校堂の御休憩室にて、しばらく御休息あらせられ、煎茶を獻り、續て高等官の諸先生に拜謁を仰付られ、畢りて本校の沿革、職員の現在數、生徒の級別、年齡授業料、教室用品料、寄宿生經費豫算、資金物品敷地、建物等最近の調査に係る調書を、御覽に供え奉りけるに、殿下には、一々御覽ありて、親しく御下問さへあらせられ、校長殿一々説明さこえ奉り、畢りて樓上東の階段より御降ありて、順次に化學教室、新築建物、博物教室、物理教室を御巡覽遊はされ、殊に物理室にては、震災豫防器を詳しく御覽にて、御下問もあらせられ、學寮の東の口より入らせられて、寮内を御覽せられ、圖書教室、瑞邦館を経て、校堂北の入口より御休憩室に還らせ給ひぬ。仄に聞く、先に友田、田丸兩教

授の阿蘇山より、撮影し來られ、噴火口などの寫眞數葉と、工科諸氏の手に成れる圖畫數葉とを、御覽に入れ奉りけるに、大に御意に叶ひ、やがて御携あそばされしといふ、辱なき御事どもなり。尙雨天、体操場、銃器庫、書庫など御覽に供え奉るべき定めなりしかども、急ぐ故と御意ありて、甚た遺憾の御氣色にて、打立たせられ、午後二時三十分、東方より御出門ありて、陸軍墓地に至らせ給ひ、それより水前寺に向はせ給ふ、職員生徒は、皆校門の前に正列して、永く見送り奉り、越えて六日の午前十一時に、熊本を發たゝらる。この日も皆々春日停車場の前に一同正列奉送申し、教授がたは御發車まで、御見送ありしと聞く。あはれ、世の常の人の心なき、裯を重ね、褥を疊ねて、猶寒さを覺ゆといふなるに、殿下には、かしこくも金枝玉葉の御身にして、闊外重寄の大任にあたらせられ、この極寒の候も、つゆ厭はせ給ふ御氣色もなく、北はつくしの山風に櫛けつり給ひ、南は八重のあら波を凌ぎ給ひ、ひたすら軍事國防の重きに御心を注かせらるゝは、さらにもいはす、萬づ御事の多き中にも、教育の道には常に御心をよせられ、一々人のほかり及ばざるすぢゝまで、御下問あらせられたりと承はる、誰か感奮激厲、令旨の辱なきに報い奉らんの心を起さゝるへき。よりて本校の紀念にもせんとて、謹て御臆臨の模様及ひ御送迎のかたはしを并せ記して、誌首に掲ぐることはしつ。